☆復活節第5主日(5月7日)の聖書朗読☆　※主任司祭からの解説があります。

第一朗読　（使徒たちの宣教　6 章 1-7 節）

そのころ、弟子の数が増えてきて、ギリシア語を話すユダヤ人から、ヘブライ語を話すユダヤ人に対して苦情が出た。 それは、日々の分配のことで、仲間のやもめたちが軽んじられていたからである。そこで、十二人は弟子をすべて呼び集めて言った。「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。 それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と知恵に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することにします。」

一同はこの提案に賛成し、信仰と聖霊に満ちている人ステファノと、ほかにフィリポ、プロコロ、ニカノル、ティモン、パルメナ、アンティオキア出身の改宗者ニコラオを選んで、使徒たちの前に立たせた。 使徒たちは、祈って彼らの上に手を置いた。こうして、神の言葉はますます広まり、弟子の数はエルサレムで非常に増えていき、祭司も大勢この信仰に入った。

第二朗読　（使徒ペトロの手紙Ⅰ　2 章 4-9 節）

この主のもとに来なさい。主は、人々からは見捨てられたのですが、神にとっては選ばれた、尊い、生きた石なのです。 あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。 そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい。 聖書にこう書いてあるからです。

「見よ、わたしは、選ばれた尊いかなめ石を、シオンに置く。これを信じる者は、決して失望することはない。」

従って、この石は、信じているあなたがたには掛けがえのないものですが、信じない者たちにとっては、「家を建てる者の捨てた石、が隅の親石となった」のであり、また、「つまずきの石、 妨げの岩」なのです。

彼らは御言葉を信じないのでつまずくのですが、実は、そうなるように以前

から定められているのです。しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。

福音朗読　（ヨハネよる福音　14 章　1-12 節）

イエスは弟子たちに言われた。「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」トマスが言った。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるでしょうか。」 イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。 わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることになる。今から、あなたがたは父を知る。いや、
既に父を見ている。」フィリポが「主よ、わたしたちに御父をお示しください。そうすれば満足できます」と言うと、イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。 なぜ、『わたしたちに御父をお示しください』と言うのか。わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられるのである。 わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。はっきり言っておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである。」

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

GW 中の日曜日です。皆さまはどこかにお出かけになりましたか？私はどこにも出かけずひたすら教会にいて、畑や花壇の手入れをして、これからの夏野菜や朝顔の花、ひまわりの花がきれいに咲くようにしていました。幸い今年の GW はお天気に恵まれて仕事がはかどりました。花も野菜も土の手入れを良くしておけばきれいな花が咲き、野菜の身も大きく立派に実りますので、土をよく耕すのが肝心なのです。私たちの生活もよい実りを望むならば、心を耕す祈りが肝心です。祈りは決まった祈りをすることが大事なのではなく、神さまのことを思い起こすことが大事なのです。仕事を始めるときに「神さまよろしく！」、そして終わったときに「神さまありがとう！」これが立派な祈りです。

第一朗読　（使徒たちの宣教　6 章 1-7 節）

人が集まり組織が大きくなると問題が出てきます。初代教会も例外ではなかったようです。集まりの恩恵を十分に受けられない人が出てきたり、人種の違いの対立など。しかし当時の使徒たちはその問題を真剣に受け止めて乗り越えていきます。今日の朗読の個所では、使徒たちが福音を伝えることに専念できるように、物を分配する役割を他の立派な信徒に任せることを決めていきました。その中には後に殉教するステファノもいました。現在の教会の役割では助祭の役を担ったようです。最後の個所に「祭司も大勢この信仰に入った」とあります。悪い祭司たちばかりがいたのではなく、本当に神の救いを待ち望んでいた祭司たちもたくさんいたのですね。

第二朗読　（使徒ペトロの手紙Ⅰ　2 章 4-9 節）

「石」または「岩」。石ころ。私たちの生活の中で最近はあまり見なくなった石。畑からは取り除かれる石。家の土台にセメントともに敷かれる石。この石は太古の地球の生成活動の産物で、今もって私たちの生活の中に

存在し続けています。使徒ペトロ、つまり「岩」は、本物の石であるイエスを土台とするように勧めています。すなわち地球創造の前から存在していた神の子イエス、これが今私たちの中にあって「石」としてあるのだと。神の「意思」を表す「石」なのだと。足元の小石をけ飛ばす前に、私たちより前からから存在する「この石」のことを思いましょう。

福音朗読　（ヨハネによる福音　14 章 1-12 節）

今日の福音には二人の弟子の名前が出てきます。トマスとフィリッポです。二人とも素朴な疑問をイエスに投げかける人々の代表です。トマスは復活したイエスの傷跡を見ない限り信じないといった弟子です。しかしイエスは二人の心の鈍さにがっかりしながらも名言を私たちのために残してくださいます。「私は道であり、真理であり、命である」と。また「私が父のうちにおり、父が私のうちにおられることを信じなさい」と。

私たちは神の前で知識をひけらかすことではなく、神に素朴に尋ねることが必要なのです。それが祈りです。そうすれば神は率直にこの私に理解できるように答えてくださるでしょう。わかったふりをする必要はないのです。多くの聖人方も困難に出会う度に、神に伺い、尋ねて祈りを捧げ聖なる道を歩いて行かれたのです。それが人生なのです。

水やり（祈り）も大事です。

P.S.

今月はマリア様の月です。祈るマリア様の姿を思い浮かべながら過ごしましょう。また、来週からは新しいミサの式次第についての短いコメントを載せていきます。

カトリック足立教会
主任司祭　野口重光